

南吉が青春を過ごしたまち 安城



安城高等女学校(安城高等学校の前身)で撮影された新美南吉。手にしているのは都築弥厚の伝記「弥厚翁」。



「こんぎつね」の作者、新美南吉は、愛知県半田市出身であることはよく知られています。しかし、南吉は、安城にもゆかりの深い人物です。南吉の生誕100年を迎える平成25年を前に、安城と南吉の関わりを紹介します。



当時の教え子に聞く、新美先生はこんな人

角岡美代子さん(19回生・大岡町出身)



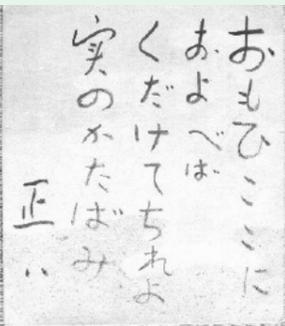
校庭の池で同級生と(右から2人目が角岡さん)

新美先生には4年間担任していただきました。先生の授業で一番印象深いのは、詩のことでした。1年生では自由詩を、2年生では叙情詩を教えていただきました。その頃は、常に詩のことを考え、たくさん詩を作っていましたね。先生が黒板にご自身の詩を書かれたら、消される前に一生懸命書き写したものです。通勤時の先生は、時に中折帽をかぶってステッキを持ち、片手にはいつも文庫本をお持ちでした。「先生はどんな本を

読んでいるのだろうか」と、そつと本の表紙を見た記憶があります。たいていは岩波の文庫本でしたが、ある日、いつもと様子の違う本が。何かと思ったら、ファーブル昆虫記でした。

先生はとても筆まめで、手紙を出すと必ず返信をいただきました。当時、日記を先生に提出していたこともあって、返事には、日記に書いた文章を引用されることもありました。私が卒業を迎えた時、色紙を先生に持っていったら、私に向けて詩を書いてくださいました。とても大切な思い出です。今でも先生の手紙や色紙は全部保存し、大事にしていますよ。

角岡さんに寄せられた色紙。色紙には、南吉の詩がしたためられている。



生い立ち

南吉(本名正八)は、大正2(1913)年7月30日、愛知県知多郡半田町(現半田市)で生まれました。4歳で母を亡くし、8歳で家族と別れて、母方の実家「新美家」の養子に入ります。複雑な少年時代を送ります。この頃の孤独や母のぬくもりへの憧れは、後の作品の中に垣間見ることが出来ます。

「新美南吉」誕生

南吉は、半田中学校(現半田高校)2年の頃には創作活動を始め、童謡や詩を雑誌に投稿していました。18歳の頃から、若手作家の登竜門であり、日本を代表する児童雑誌の『赤い鳥』に作品を投稿するようになります。昭和6年5月号に童謡「窓」が初入選、以後次々に掲載されます。代表作「こん狐」も、昭和7年1月号に掲載されました。そして、この頃からペンネーム「南吉」が定着していきます。

昭和7年、東京外国語学校英語部文科に入学。東京では、『赤い鳥』を通じて、異聖歌や与田準一、江口榛一などとの出会いがありました。彼らとの交流を

「こん狐」が掲載された雑誌「赤い鳥」昭和7年1月号



通じて、「新美南吉」の名は、児童文学の世界で徐々に認められていきます。

安城高等女学校へ

順調にみえた東京生活ですが、昭和11年、体調を崩し帰郷することになります。その後、会社勤めをしますが肌にあわず、また、経済的にも苦しかったようです。そんな中、中学時代の恩

南吉が青春を過ごしたまち 安城

問▶企画政策課(☎71)2204)

4月28日(土)ギャラリー&カフェ南吉館オープン
 実際には南吉が通ったとされる御幸商店街の喫茶店を昭和初期風に改装します。店では「安城時代」の南吉や執筆作品などを紹介。また、定期朗読会を開催

●問い合わせ 企画政策課(☎71)2204)

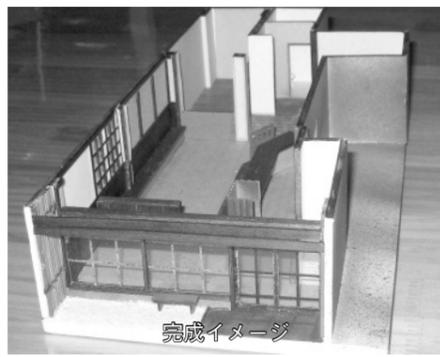
「こんぎつね」や「手ぶくろ」を買いになど、新美南吉の代表作品に登場するキツネをイメージ。胸には、旧安城高等女学校の教え子たちが建てた「ででむし詩碑」にちなみ、カタツムリのマークがついています。南吉記念のイベントなどに登場します。



サルビーが新美南吉バージョンに变身!

生誕百年に向けた取り組み

し、訪れる人にボランティア解説をします。学校給食で話題となった「南吉からのおくりもの(きつねクッキー)」などの南吉グッズも販売。南吉をより深く知るための拠点を目指します。

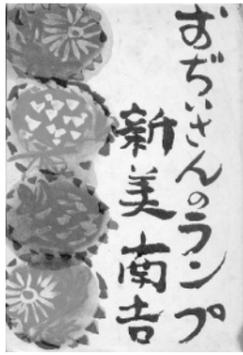


- ところ 御幸本町14-13
- 営業時間 午前8時〜午後6時(原則(月)を除く)
- 問い合わせ 商工課(☎71)2235)

南吉朗読ボランティア養成講座

主に新美南吉作品を朗読するボランティアをしませんか。講座終了後は、南吉館で定期朗読

南吉初の童話集「おぢいさんのランプ」



安城高等女学校に赴任した翌年、東京外国語学校時代の友人

安城時代の執筆活動

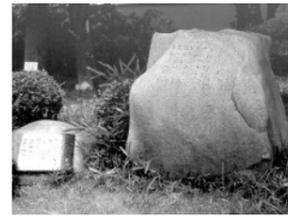
教師としての南吉は、特に、作文や詩の指導を熱心に行っていました。生徒に作文を書かせ、それを丁寧に添削し、優れた作品は授業で読み上げることもありました。また、生徒から提出された日記も丹念に読み、言葉を書き添えています。南吉自身も、生徒との交流から刺激を受け、創作のヒントを得ることもありました。

師の尽力により、安城高等女学校の教員になることが決まりました。25歳のときです。南吉は、英語・国語・農業を教えるほか、着任と同年に入学生した19回生の学年担任になりました。彼女たちを、卒業までの4年間担任し、最も親密な交流がありました。

安城と新美南吉

で、新聞記者の江口榛一からの原稿依頼をきっかけに「最後の胡弓弾き」など、次々に作品を執筆します。こうした中で、昭和16年に初の単行本『良寛物語 手毬と鉢の子』が、さらにその翌年には、童話集『おぢいさんのランプ』が出版されました。

南吉は昭和18年3月22日、喉頭結核で亡くなります。29歳と7カ月でした。昭和23年、南吉をしのんだ元同僚や教え子たちによって、安城高等女学校の中庭に南吉の詩が刻まれた「ででむし詩碑」が建てられました。南吉の顕彰碑第1号です。安城高等女学校教員という社会的地位を得てでむし詩碑で経済的に安定し、教え子との交流を通して、精神的にも充実していた「安城時代」の5年間は、新美南吉が最も輝いた時期といえるのです。



市長インタビュー 「再発見・新美南吉」

近年、ほかの地域から安城に移り住んできた人が増えたことに伴い、南吉と安城のつながりを知らない人も増えてきました。来年の南吉の生誕100年を機に、今一度、南吉の安城での足跡を皆さんに再発見してもらいたいと考えています。

体が弱く、不遇な環境もあり、複雑な幼少期であった南吉。女学校教師として過ごした安城時代は、人生で最も充実した時代であったと聞きまを何とか伝えることができないか思案しました。一番重要なのは、市民の皆さんを始め、多くの皆さんが、南吉自身や童話に興味を持って、南吉の世界を楽しんでいただく事だと思っています。そこから浮かんできたのが、南吉にちなんだま



ちづくりでした。「こんぎつね」は、全国の子どもたちに知られています。南吉童話はほかにたくさんあります。子どもたちには、いろいろな南吉童話を読んでほしいですね。そして、南吉が安城にとってもゆかりのある人だと気づいてもらえれば、こんなにうれしいことはありません。今後は、全国的に知名度の高い新美南吉が、実は安城に大変ゆかりの深い人なんだと再認識できる、意義あるイベント・まちづくりを実行していければと考えています。

- ところ 堀内公園
- 問い合わせ 都市計画課(☎71)2243)

新美南吉童話のイメージがひろがります

昨年、JR安城駅前商店街に完成し、大好評の「南吉ウォールペイント」。今年は、商店街のほか公共施設の壁面にも、南吉童話をイメージした絵を描きまします。また、駅前に整備する歩道には、南吉と安城の関わりをイメージした修景施設を設置していきます。

- 問い合わせ 企画政策課(☎71)2204)、南明治整備課(☎71)2245)



4月1日(日)から、循環線をはじめ全路線のバスが新美南吉仕様に模様替えます。

■南吉仕様バスと一緒に写真を撮りませんか?

●とき 4月21日(土)・22日(日)午前9時〜午後4時30分